

Duke Social Support Index 日本語版 (DSSI-J) の開発

岩瀬 信夫¹, 池田 貴子²

Development of Japanese Version of Duke Social Index (DSSI-J)

Shinobu Iwase¹, Takako Ikeda²

35項目Duke Social Support Index日本語版を都市部の950件に簡易標本抽出法にて配布し郵送法で回収した699件のうち412件のソーシャルサポート項目25項目への完全回答を基に、信頼性と妥当性の検証を行った。探索的因子分析はバリマックス回転を伴う最尤法を用い22項目3因子が抽出された。次に信頼性の検証を行いクロンバックの α 係数はDSSI-J (α :.909), 第1因子(情緒的支援: α :.868), 第2因子(手段的支援: α :.861), 第3因子(認識評価的支援: α :.838)という結果を得た。更に構成概念妥当性を検証し、「ソーシャルサポート」は「情緒的支援」, 「手段的支援」, 「認識評価的支援」からなる15項目の2次因子モデルとしてGFI:0.916, AGFI:0.892, CFI:.925, RMSEA:0.068で適合性が支持された。

キーワード: DSSI-J, ソーシャルサポート, 質問紙開発, 検証的因子分析

I はじめに

Lazarusらのストレス学説を背景に, Caplan¹⁾をはじめ, Cobb²⁾, Kahn³⁾, Weiss⁴⁾, House⁵⁾らのソーシャルサポートのストレス緩衝仮説の流れに沿った研究が数多くなされてきている。

看護領域や精神医療領域ではNorbeckのソーシャルサポート質問紙であるNorbeck Social Support Questionnaire (NSSQ) が南ら(1990)により日本語版が開発され⁶⁾, 使用されているが, 簡便さに欠け, 岩瀬ら(1997)により精神疾患患者への使用にあたっては負担が大きいという指摘もされている⁷⁾。そこで, より簡便な測定具を開発し, 一般人はもとより将来的に精神疾患患者にも使用可能な測定具としてLandermanとGeorgeら(1989)により開発されたDuke Social Support Index (以下DSSI) 11項目版に注目した⁸⁾。この測定具の日本語版の開発は波多江ら(2002)によって行われているが⁹⁾, 高齢者のストレス反応に対してソーシャルサポートの緩衝作用をみるために開発されたものであった。統合失調症患

者のソーシャルサポートの幅の狭さや, 期待の量の違いも一般人と比較し指摘されているが, ソーシャルサポート研究を行っていく上で, より簡便な一般人, 障害者に共用できる測定具の開発は急務である。今回の研究では可能な限り原版に近いDSSI日本語版の開発を行い, それをもとに, 次の精神障害者や高齢者のソーシャルサポート測定具開発につなげていく基礎研究とすることを目的とした。

DSSIはDuke大学のGerogeにより開発され, その後メンタルヘルスの効果用や精神疾患を持たない老人用に21項目版, 11項目版などが開発されていっている⁸⁾。オリジナルのDSSIはKoenighらの文献によるとLandermanら(1989)のものからの引用となっているが¹⁰⁾, 彼らの文献ではライフイベントスケールとDSSI11項目版が提示されており, 混乱が見られる。本研究ではKoenighの文献に掲載されている項目に基づいたDSSIをもとに検討を行うこととした。2つの文献から得られたDSSIはソーシャルサポートの4つの面, ソーシャル・ネットワーク, 社会的交流, 主観的サポート, 及び手段的サポートを測定する2件法と3件法の混在したツールである。

¹愛知県立看護大学(精神看護学), ²高知女子大学看護学部

調査研究を行うのにあたり、統計処理を簡便に行うためには質問項目ごとの距離を仮に一定とすることとし、5件法とした。34番目の家族構成の項目を1番目に置き、順送りにしたこと、婚姻状況に関する質問を日本文化を考慮しながら細分化したことを除き、オリジナルのDSSIと同様の構造を保った。現在コンタクトのとれる開発者の一人であるGeorge博士の許可を得てDSSIという名称を明示することを条件に改編の許可を得た。

II 研究方法

1. 研究期間

2003.9~2003.12

2. 調査方法

関西以西の成人950名に対し、簡易標本抽出法(雪だるま式サンプリング法)にて質問紙を配布し、郵送法にて回収した。

3. 調査内容

1) 基本属性

性別、年齢、職業、学歴、病気の有無

2) DSSI日本語版(以下DSSI-J)

DSSI-Jはソーシャルサポートを主観的に評価できる質問紙で35項目からなる。No.1~9、35の項目はソーシャルネットワークサブスケール、社会交流サブスケール、その他であり、No.10~34は主観的ソーシャルサポートおよび手段的サポートを測定する25項目で構成されている。後者の25項目の回答は、「非常に(いつもある)」5点、「わりに(しばしば)」4点、「多少(ときたま)」3点、「あまり(あまりない)」2点、「まったく(まったくない)」1点の5件法である。(表1)

日本語版の訳に当たっては米国留学経験のある研究者による翻訳ののち、英語を母国語とするネイティブの翻訳業者による校閲、バック・トランスレーションを加え、精神医学者による表面妥当性の確認を行った。

3) 地域住民用ソーシャル・サポート尺度(以下JMS-SSS)

堤らによって開発された日本人の一般地域住民の調査用に開発された質問紙、配偶者、配偶者以外の家族、友人の3種類の質問紙を使い、10項目の質問からなる4件法の質問紙¹¹⁾。

4) コーピング尺度

LazarusとForkmanのストレス・コーピング理論に基づき尾関により開発された問題焦点型、情動焦点型、回避・逃避型の下位尺度を持つ14項目からなる4件法の質問紙¹²⁾。

5) 主観的良好状態評価表日本語版(以下GWBS)

Dupuyが開発したGeneral Well-Being Scheduleを中山によって日本語版として開発された18項目からなる質問紙で日本人にあっては「うつ、健康関心、生活満足度と情緒安定性」の17項目3因子モデルで信頼性・妥当性の検証がされている¹³⁾。

4. 倫理的配慮

書面にて調査内容や調査への参加は自発的なものであること、対象者に不利益を生じないこと、個人や地域が特定できないよう、無記名、自記式であることを説明した。調査用紙は郵送法にて回収を行い、回収時点で参加同意があったと判断をした。

また対象データは個人や地域を特定できないよう、コード化し解析は集団として行った。

DSSI日本語版の開発に関してはDuke大学のGeorge博士(許諾:GEORGE, L. K. at Duke University)よりDSSIと表示することを条件に改変の許可を得ている。

5. 分析方法

DSS-Jは35項目のうちNo.1~9・35のソーシャルネットワークサブスケール、社会交流サブスケールを除くソーシャルサポートに関する質問25項目を分析の対象とした。質問紙の妥当性の検証は探索的因子分析と検証的因子分析を併用し、因子的妥当性(構成概念妥当性)の検討を行った。併存妥当性に関してはDSSIと他の測定具の相関により検討を行った。信頼性の検証はクロンバックの α 係数による内部一貫性を検証した。適合度の判定はGFI, AGFI, CFI, が0.9以上, RMSEA0.07以下をよく適合しているものとした。解析ソフトはSPSS16.0J及びAmos16.0Jを使用した。

III 結 果

調査用紙の配布数950件のうち699件(73.6%)の回収を得たが、ソーシャルサポートに関する25項目についての完全有効回答を得た412件(43.4%)を分析対象とした。

表1 DSSI-J質問紙

DSSI-35J (ソーシャルサポート質問紙)	
Original 35 items of the Duke Social Support Index	
1.	現在、本人を含む同居者数 (人) 34. Household size
2.	1時間以内の距離に住む両親と祖父母の人数 (人) 1. Number of parents and grandparents who live within 1 hour's travel.
3.	1時間以内の距離に住む兄弟、姉妹の人数 (人) 2. Number of brothers and sisters who live within 1 hour's travel.
4.	1時間以内の距離に住む子どもたちの人数 (人) 3. Number of children who live within 1 hour's travel.
5.	1時間以内の距離に住む、頼れる、身近な家族の人数 (人) 4. Number of family members within 1 hour that subject can depend on feel close to.
6.	先週、同居している人以外の人と会った回数 (回) 5. Number of times past week spent time with someone not living with.
7.	先週、友人や親類と電話で会話した回数 (回) 6. Number of times past week talked with friends/relatives on telephone.
8.	先週、あなたが仕事以外で関わっているグループ (自治会、町内会、サークル、宗教活動等) の会合に参加した回数 (回) 7. Number of times past week attended meetings of clubs, religious groups, or other groups that you belong to (other than at work).
9.	仕事や学校で誰かと話す時間 (/日) 8. Amount of time spent talking with other people at work or school.
10.	友人や身内と会う頻度に満足していますか 非常に わりに 多少 あまり まったく 満足している 満足していない。 9. Are you satisfied with how often you see your friends and relatives?
11.	どれほどの頻度で寂しさを感じますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 感じる 感じない 10. How often do you feel lonely?
12.	家族や友人はあなたを理解していますか とても わりに 多少 あまり まったく 理解している 理解していない 11. Do family and friends understand you?
13.	長く続いている親しい人が一人以上いますか 大勢いる 何人かいる 2~3人いる 1人はいる まったくない 12. Is there at least one person with whom you have a close, lasting relationships?
14.	家族や友人はあなたを役に立つと思っていますか とても わりに 多少 あまり まったく 役に立つと思っている 役に立たないと思っている 13. Do you feel useful to family and friends?
15.	家族や友人に何が起っているか知っていますか ほとんど わりに 多少 あまり まったく 知っている 知らない 14. Do you know what's happening with family and friends?
16.	家族や友人に話を聞いてもらっていると思いますか ずいぶん わりに 多少 あまり まったく 聞いてもらっている 聞いてもらっていない 15. Do you listened to by family and friends?
17.	家族や友人の中であなたに明確な役割があると思いますか はっきりと わりに 多少 あまり まったく ある ない 16. Do you feel you have a definite role in family and among friends?
18.	トラブルの時家族や友人を頼れますか ほとんど わりに 多少 あまり まったく 頼れる 頼れない 17. Can you count on family and friends in times of trouble?
19.	あなたの一番深刻な問題について話ができますか ほとんど わりに 多少 あまり まったく 話せる 話せない 18. Can you talk about your deepest problem?

20. 家族や友人との関係でどれくらい満足していますか ほとんど わりに 多少 あまり まったく 満足している 満足していない
19. How satisfied are you with relationships with family and friends? 家族や友人は次のような場合にいくつか援助をしてもらえますか Does family or friends ever help in any of the following ways :
21. 病気のとき手助けしてもらえますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 20. Help out when you are sick?
22. 買い物に行ってもらえますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 21. Shop or run errands for you?
23. プレゼントをもらえますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 22. Give you gifts (presents)?
24. お金を貸してもらえますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 23. Help you out with money?
25. 家の周りの片付けをもらえますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 24. Fix things around your house?
26. 家事をしてくれる人がいますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 25. Keep house for you or do household chores?
27. 仕事や経済的な問題のアドバイスをもらえますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 26. Give you advice on business or financial matters?
28. 仲間にさそってもらえますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 27. Provide companionship to you?
29. あなたの問題を聞いてもらえますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 28. Listen to your problems?
30. 生活上の問題の対処についてアドバイスをもらえますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 29. Give you advice on dealing with life's problem?
31. 車を出すなど、交通手段を準備してもらえますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 30. Provide transportation for you?
32. 食事を作ってもらえますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 31. Prepare or provide meals for you?
33. 子どもの世話をもらえますか いつも しばしば ときたま まれに まったく 32. Help take care of small children?
34. 特別な援助が必要ですか いつも しばしば ときたま まれに まったく 33. Do you need additional Help
35. あなたは今結婚しているか誰かと結婚する予定がありますか。 結婚している 婚約している 検討している まだ考えられない まったく無い 34. Are you presently married or currently living with someone as though married?
Duke Social Support Index taken from Koenig HG, Westlund RE, George LK, et al Abbreviating the Duke Social Support Index for Use in Chronically Ill Elderly Individuals. Psychosomatics1993 ;34 ;61-69

1. 基本的データ

1) 調査対象の属性

男性145名, 平均年齢39.5歳 (標準偏差12.2歳), 女性267名, 平均年齢38.6歳 (標準偏差11.3歳)であった。(表2)

職業は会社員262名, パート48名, 主婦37名, 学生21名, 自営業18名その他と続き, 有職者が80.8%を占めていた。

学歴に関しては, 高卒139名, 専修学校卒106名, 大卒70名, 短大卒35名, 大学在籍中34名, 中卒21名, その他19名, 未回答8名であった。

現在病気の治療を受けている者85名, 受けていない者318名, 未回答8名であった。

表2 調査対象の年齢階層

性別	年齢層	実数	平均年齢	±SD	既婚者数	比率%
男性	10代	2	18.0	1.41	2	100
	20代	41	24.7	3.26	18	43.9
	30代	34	34.0	3.45	5	14.7
	40代	31	44.7	2.45	3	9.7
	50代	28	54.8	2.63	2	7.1
	60代	7	64.3	2.75	1	14.3
	70代	2	77.0	4.24	0	0
	合計	145	39.5	13.6	31	21.4
女性	10代	6	18.5	0.84	3	50
	20代	64	25.5	2.75	19	29.7
	30代	68	34	3.03	7	10.3
	40代	76	44.2	2.67	12	15.8
	50代	42	52.6	2.12	10	23.8
	60代	10	62.3	2.26	0	0
	70代	1	72	—	0	0
	合計	267	38.6	11.31	51	19.1
合計	412	38.9	12.154	82	19.9	

2) DSSIのソーシャルネットワークサブスケール, 社会交流サブスケール等10項目の記述統計

全体に占める既婚者の割合は19.9%であり, 本人を含む同居者数の平均値は3.2名, 1時間以内に住む尊属は1.6名, 同胞は1.4名, 子供は0.7名, 身内は3.5名であった. また, 先週1週間の会話の数の平均値は16.6回, 電話の回数は8.8回, 集会等への参加の回数は0.7回, 職場や学校で誰かと語り合った回数10.9回であった. (表3)

2. DSSI-Jの因子分析

1) 探索的因子分析

DSSI-Jの25項目の構成概念を明らかにするためSPSSを用いて最尤法による探索的因子分析を行った. 分析に先立ち, 質問項目34番に関しては天井効果が見られたため因子分析対象から除外した. 1回目の因子分析の結果因子負荷0.4未満のものを削除の対象としたが, 24番(お金を借を貸してもらえますか)については関係の深さを表す要素として, 項目にとどめることとし, 最終的に22項目3因子が抽出されHouseのモデルを参照し第1因子を「情緒的支援」, 第2因子を「手段的支援」第3因子を「認識評価的支援」と命名した. (表4)

表3 DSSIのQ1～Q9の項目の記述統計

		Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
性別	年齢層	同居者数	尊属/1時間	同胞	子供	身内	会話/週	電話/週	集会/週	語合/日
男性	10代	4	2	0	0	2	5	2	3.5	8.5
	20代	2.7	2.1	1.1	0.1	4.3	22.9	9.7	1.3	9.3
	30代	3.4	2	1.3	0.7	3.4	21.5	11.8	0.9	11.3
	40代	3.6	1.4	1.5	0.5	4.4	15.8	6.5	0.6	13.7
	50代	2.8	0.8	1.8	0.7	2.5	11.7	5.1	0.4	15.7
	60代	2.4	1.6	2	1.4	3.6	13.7	10.9	1.3	11
	70代	5.5	0	1.5	1	2.5	9.5	6.5	1	1
	合計	3.1	1.6	1.4	0.5	3.7	18	8.6	0.9	11.9
女性	10代	2.8	2	3.3	0	4	18.3	16	2.2	14.7
	20代	2.8	2	0.8	1	3.8	16.6	10.2	0.3	9.3
	30代	3.4	2.4	1.4	0.8	3.3	11.9	6.2	0.6	7.8
	40代	3.5	1.4	1.4	0.6	3.1	13.8	8.1	0.7	9.2
	50代	3	0.7	1.6	0.7	2.4	16.2	8	0.5	15.8
	60代	3.1	0.2	2.4	1.2	4.1	14	5.3	1.4	7.6
	70代	3	0	1	1	1	3	4	1	1
	合計	3.2	1.6	1.3	0.8	3.5	15.8	8.9	0.6	10.4
合計	3.2	1.6	1.4	0.7	3.5	16.6	8.8	0.7	10.9	

表4 最尤法による因子分析の結果

因子名・項目	因子負荷量			
	I	II	III	
全体クロンバック α : 0.909				
第I因子「情緒的支援」9項目 クロンバック α : 0.868				
D17 家族や友人の中であなたの役割があるとおもいますか	0.716	0.129	0.039	
D18 トラブルがあるとき家族や友人に頼れますか	0.695	0.038	0.257	
D19 あなたの一番深刻な問題について話せますか	0.654	0.032	0.336	
D14 家族や友人に役に立つと思いますか	0.650	0.146	-0.041	
D15 家族や友人に何が起きているか知っていますか	0.641	0.029	0.118	
D16 家族や友人に話を聞いてもらっていると思いますか	0.635	0.039	0.378	
D20 家族や友人との関係でどれくらい満足していますか	0.550	0.124	0.295	
D13 長く続いている友人はいますか	0.489	0.014	0.245	
D12 家族や友人はあなたのことを理解していますか	0.478	0.119	0.266	
第II因子「手段的支援」6項目 クロンバック α : 0.861				
D26 家事をしてくれますか	-0.006	0.890	0.095	
D32 食事を作ってくれますか	0.028	0.825	0.092	
D25 家の周りの片付けをしてもらえますか	0.048	0.650	0.299	
D33 子ども(老親)の世話を手伝ってもらえますか	0.160	0.539	0.235	
D22 買い物に行ってもらえますか	0.153	0.524	0.439	
D21 病気のとき手助けしてもらえますか	0.183	0.524	0.404	
第III因子「認識評価的支援」7項目 クロンバック α : 0.838				
D29 あなたの問題を聞いてもらえますか	0.445	0.200	0.733	
D30 生活上の問題への対処についてアドバイスしてくれますか	0.380	0.261	0.678	
D28 仲間にさそってくれますか	0.412	0.229	0.546	
D23 プレゼントやお土産をいただきますか	0.139	0.241	0.519	
D27 仕事や経済的問題のアドバイスをしてくれますか	0.238	0.402	0.502	
D31 車を出すなど、交通手段を準備してくれますか	0.250	0.286	0.438	
D24 お金を貸してもらえますか	0.060	0.311	0.374	
	固有値	7.97	2.97	1.27
	寄与率 (%)	36.21	13.49	5.75
	累積寄与率 (%)	36.21	49.70	55.45

2) 信頼性の検証

また、DSSI-Jの総得点と、各因子の得点の信頼性の検証を行った結果、クロンバックの α 係数はDSSI-J (α : .909), 第1因子(情緒的支援; α : .868), 第2因子(手段的支援; α : .861), 第3因子(認識評価的支援; α : .838)という結果が得られ信頼性が検証された。(表4)

3) 構成概念妥当性の検証

構成概念妥当性を検証するため、上記の最尤法の結果についてモデルの検証を行ったが不適合であった(GFI: 0.768)。次に3因子モデルによる質問項目の精選を行い因子構造の点検を行った。12番から33番までの検証的因子分析を行った結果、17番(家族や友人の中であなたの役割がありますか)と14番(家族や友人に役に立つと思いますか)の誤差に相関が見られ、似通った質問項目でもあるため、因子寄与率の低い14番を削除した。次に21番(病気のとき手助けしてくれますか)と22番(買い物

に行ってくれますか)の誤差に相関が見られ、どちらも直接的なサポートの内容であるため因子寄与率の低い21番を削除した。さらに26番(家事をしてくれますか)と32番(食事を作ってくれますか)に誤差相関があり、32番の食事を作るは、家事に含まれるため、32番を削除した。27番(仕事や経済的問題のアドバイスをしてくれる)と30番(生活上の問題への対処についてアドバイスをしてくれる)に誤差相関があり、仕事や経済的問題は、生活上の問題への対処に含まれる内容と考え、27番を削除した。25番(家の周りの片付けをしてもらえますか)と26番(家事をしてくれますか)に誤差相関があり、家の周りの片付けは、家事に含まれるため、25番を削除した。16番(家族や友人に話を聞いてもらっている)と29番(あなたの問題を聞いてもらっている)に誤差相関があり、どちらも話を聞いてもらっているという内容だが、問題を聞いてもらうは、困った際のサポートであり、また、情緒的サポートには「理解してもらっている」や「親し

い友人」などの項目があるため、16番を削除した。

こうした操作を行った結果「ソーシャルサポート」の下位に「情緒的支援」、「手段的支援」、「認識評価的支援」からなる15質問項目の2次因子モデルが得られた。GFI:0.916, AGFI:0.892, CFI:0.925, RMSEA:0.068でありAGFIが若干0.9に及ばないもののGFI, CFI, RMSEAのスコアを考慮すれば適合性はあるものと評価した。それぞれの信頼性の検証結果は「ソーシャルサポート」(α :.868), 「情緒的支援」(α :.803), 「手段的支援」(α :.758), 「認識評価的支援」(α :.857)であった。手段的支援がやや低い値であるが、.75以上であり許容範囲内であると判定した。(図1)

4) 基準関連妥当性の検討

検証的因子分析により検討された4因子15項目モデルに対し併存妥当性の検証を行った。JMS-SSS (α :.913)の家族、友人とのDSSIソーシャル・サポート得点各因子の相関を検討した結果、「ソーシャルサポート」と家族 r :.533, 友人 r :.573, 「情緒的支援」と家族 r :.404, 友人 r :.473, 「手段的支援」と家族 r :.473, 友人 r :.430, 「認識評価的支援」と家族 r :.443, 友人 r :.546であった。併存妥当性の基準である r :.8には及ばなかった。また、コーピング尺度3因子とGWBSに相関は認められなかった。これらの結果から基準関連妥当性は認められなかった。

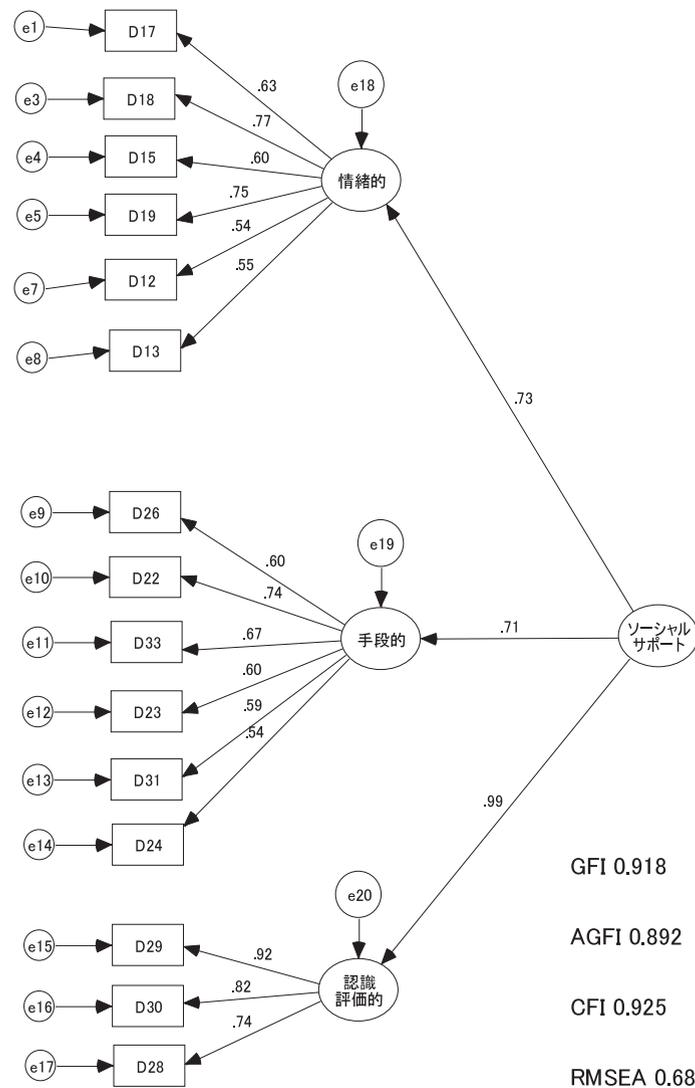


図1 DSSI 因子モデル (標準化係数)

IV 考 察

1. 対象者および本調査票の特性について

本研究の対象集団は関西、中国、九州地方の都市部の一般住民ではあるが、簡易標本抽出法であるため、ランダムサンプリングしたものではない。また、一般企業のみでなく、病院職員も調査対象に入っているため、学歴の中に占める専修学校卒者の比率が高くなっている。調査対象者は10代から70代までであり、特に20代から50代を中心とした壮年期の女性の多い集団であった。男女とも20%が既婚者で、84%の対象者が就労していた。また、既婚者の割合は20%弱と独身の対象者が多い結果となったが、同居者数が約3名であることより、両親など同居している対象者が多く、独身単身生活者が少ない集団と思われた。したがって、本調査対象者は、単身で家族と同居し、就労している壮年期の多い集団と言えよう。

2. DSSI-Jの構成要素

本研究はGerogeらによって開発されたDSSIの日本語版としてその翻訳の内容の検討、バック・トランスレーションなどを行いその表面妥当性の確認を行い、質問項目を同定し、最尤法による探索的因子分析により22項目3因子「情緒的支援」、「手段的支援」、「認識評価的支援」が抽出された。オリジナルでは「主観的支援」、「手段的支援」の2因子の構成であったが、彼らが主観的支援としているものはHouseの情緒的な支援と一致し、お互いを知り、頼り合い、関係性への満足を得る関係を示している。手段的支援としているものの中には仲間を誘われたり話を聞いてもらい、生活上のアドバイスをもらったりするという単に手段的な支援ではなく、コミュニケーションの輪に入って情報を得たり、フィードバックを得るカテゴリーとしての認識評価的支援が存在した。抽出された因子の手段的支援は家事や子育て、買い物や頼んだり、車を出してもらったりと日々の生活の具体的な助けを融通する内容であった。

3. DSSI-Jの信頼性・妥当性について

今回の検討により15項目4因子からなる2次因子モデルが最終的に検証されたが、Landermanらが34番の「特別な援助が必要ですか」という項目をほぼ同時期に発表している11項目版⁸⁾では「家族や友人から今以上の特別な援助が必要ですか」と表現しているように日本語版に

おいても内容の精選の必要な測定具であったと思われる。本研究ではソーシャルサポート項目25項目から10項目を削除し15項目で構成概念妥当性を得ることができた。しかし、基準関連妥当性については全体の平均年齢が38.9歳SD12.1歳であることは併存妥当性を測るソーシャルサポート測定具であるJMS-SSSが80%以上を既婚の40歳から69歳の中高年齢層を対象として開発されているためか、集団特性の違いが若干反映されているように思われる。しかし、家族と友人では因子間に相関の強さに差が見られ、サンプル数の蓄積を含む検討の必要性が求められた。

4. 研究の限界と今後の課題

本測定具は一般社会人のソーシャルサポートの特徴を把握し、対象者がストレスにあった場合の抑うつ等に対するストレス緩衝作用を測るために開発されている。対象者のソーシャルサポートを短時間で広い範囲において評価し、不足していると思われるソーシャルサポートに焦点を当てることにより適切なサポートを効率よく受けることができ、その人にとってより豊かな生活を送れるよう支援できると考える。また、質問項目を絞り込むことにより、思考や感情、認知の歪みのある人にも計量的なアプローチが可能になると考え研究を行ってきた。しかし、15項目に絞ってはいるが併存妥当性の検証において大きな課題が残った。また、対象者が女性に多く、職業や地域性がバイアスになっている可能性も否定できない。今後、測定用具の洗練にあたっては対象とその地域の拡大を行い調査をするとともに、少しずつ当初の目標である対象者をサンプルに組み込む努力をしながら質問紙の精選と、対象特性ごとの信頼性、妥当性の検証を積み重ねていく必要がある。

V おわりに

本研究において一般人に対するDSSI-Jの信頼性と妥当性の検証に関する基礎研究は概ね良好な結果を得たが、研究の出発点にある、ソーシャルサポートのストレス緩衝作用を精神科臨床やその他の医療福祉のフィールドで活用できるように、検証を重ねていく必要がある。

また、測定具そのものの精選もはかり、より使いやすいものに、検討を重ねていく必要がある。

謝 辞

調査にあたり間に入り協力していた多くの方々，膨大なアンケートに記入し，投函していただいた調査協力者に感謝いたします。

引用文献

- 1) Caplan, G.: Social Support systems and community mental health. Behavioral Pub. New York, 1976
- 2) Cobb, S.: Social Support and Health through the Life Course. (eds) M. W. Riley, Aging from Birth to Death: Interdisciplinary Perspectives. pp. 93-106: American Association for the Advancement of Science. DC. 1979
- 3) Kahn, R. L.: Aging and social support, (eds) M. W. Riley, Aging from Birth to Death: Interdisciplinary Perspectives. 79-91: West View, CO. 1979
- 4) Weiss, R. J., The provisions of Social Relationships, (eds) Z. Rubin, Doing unto Others, 17-26, Prentice Hall, NJ. 1974
- 5) House, J. S.: Work Stress and social support. Addison-Wesley. CA, 1983
- 6) 南裕子, 井部俊子, 太田喜久子, 片田範子, 上泉和子, 山本あい子, 小代聖香, 西尾鏡子, 古庄しおり: ノーバック・ソーシャルサポート質問紙日本語版における構成概念の妥当性の分析. 日本看護科学学会誌, 10(1), 52-62, 1990
- 7) 岩瀬信夫, 渡邊鏡子: 慢性精神分裂病の患者のソーシャルサポートネットワークに関する研究. 精神看護, 53, 50-59, 1997
- 8) Landerman, R., George, L. K., Campbell, R. T., and Blazer, D. G.: Alternative Models of the Stress Buufering Hypothesis, Am. J. Community Psychol., 17 (5), 625-642, 1989
- 9) 波多江陽子; 山崎不二子; 古川秀敏; 岩瀬信夫; 野口房子; 国武和子ソーシャル・サポート質問紙の信頼性, 妥当性に関する検討(1): 大学生を対象にして. 日本看護研究学会雑誌, 25(3), 311, 2002
- 10) Koenig, H. G., Westlund, R. E., George, L. K., Huges, D. C., Blazer, D. G., and Hybels, C: Abbreviating the Duke Social Support Index for Use in Chronically Ill Elderly Individuals. Psychosomatics, 34, 61-69, 1993
- 11) 堤明純, 堤要, 折口秀樹, 高木陽一, 詫摩一則, 五十嵐正紘: 地域住民を対象とした認知的社会的支援尺度の開発. 日本公衆衛生学会雑誌, 41, 965-974, 1994
- 12) 尾関友佳子: 大学生用ストレス自己評価尺度の改定: トランス分析にアクションな分析に向けて. 久留米大学大学院比較文化研究年報, 1, 95-114, 1993
- 13) 中山健夫: 主観的良好状態評価一覧 (General Well-Being Schedule: GWBS) 日本語版の開発: 妥当性・信頼性・受容性の検討. 厚生指標, 49(3), 8~18, 2002